



## 第13回光学シンポジウム（光学技術・学術講演会）報告

荒川泰彦

東京大学先端科学技術研究センター 〒153 東京都目黒区駒場 4-6-1

第13回光学シンポジウムは、昭和63年6月24日(金)9時20分より17時まで東京大学生産技術研究所第一会議室で開催された。当日は雨天であり参加の数が心配されたが、結果的には88名に達し盛況であった。鶴田匡夫幹事長(ニコン)からの開会の辞の後、午前中8件、午後前半4件の一般講演がなされた。また午後の後半には特別企画としてパネルディスカッション“光学の現状と将来—教育・研究開発の現場からの期待”が行なわれた。

一般講演の部ではレンズ・ミラー設計(3件)、光計測(6件)、レーザプロセス(2件)、光ファイバ(1件)に関する話題について発表があった。また発表組織は、大学関係6件、会社関係6件であった。

さて、このシンポジウムは本来A会員が応用物理学会において登壇権がないために、発表の機会を与える場として発足したものである。一般講演12件のうちA会員による発表が4件あったことを考えると、このような意義はまだ存在していると考えられる。一方、本会の名称において「シンポジウム」が最初に現われ「光学技術・学術講演会」が( )の中に入っているのは、たんにこのような一般講演のみならず何らかの企画が期待されていることによるものと思われる。このような観点から、実行委員会においてテーマについて議論を進め、その結果、今回はいわゆるテクニカルなテーマではなく、この際「光学」そのものを考える場をパネルディスカッションとして設けようということになった。

この結論に基づき鶴田幹事長とご相談しながら具体的な企画をすすめた。その結果、司会として神谷武志氏(東大)、パネラーとして伊賀健一氏(東工大)、谷田貝豊彦氏

(筑波大)、諸隈肇氏(オリンパス)、内田直也氏(NTT)、山口一郎氏(理研)という壮々たる方々にお集まりいただき討論をしていただくことになった。これらの方々にお願いをするに際しては、いわゆる optics 的な分野と optoelectronics 的な分野とのバランスを考慮した。パネルディスカッションでは神谷氏の司会のもと、各氏が光学の現状と将来について教育、研究それぞれの立場からの考え方を述べられた。全体の討論の中で光学が今後進むべき方向がある程度明らかにされたが、やはりそれぞれの立脚している研究分野によって意見が分かれるところもあった。このパネルディスカッションの内容については、ここではこの程度にとどめておくことにする。

懇親会はシンポジウム終了後直ちに行なわれたが、30名を越す方々の参加を得ることができた。それぞれの話の輪の中で、パネルディスカッションの続きというべき話題などが和やかな雰囲気の中で話し合っていた。

以上述べたように、今回は、テクニカルな発表と光学の将来を考える企画がそれなりにうまく調和し、バランスのとれたシンポジウムとなったのではないかと考えている。

最後に、お忙しい中熱心に参加討論された方々、とくにパネルディスカッションの司会、パネラーの方々に感謝するとともに、本シンポジウムの実行委員としてご尽力いただいた岡田勝行氏(千葉大)、佐久間伸夫氏(リコー)、柴田宣氏(NTT)、志村努氏(東大)、百村和司氏(オリンパス光学)、若木守明氏(東海大)にあらためて御礼を申し上げたい。また本シンポジウムを全面的に支援してくださった鶴田幹事長に謝意を表する。

(1988年8月19日受理)